

## 平成 29 年度都立看護専門学校社会人入学試験小論文課題

次の文章を読んで設問に答えなさい。

独学する心は、学問や読書にだけあるのではもちろんない。およそ人が生きるために学ぶ行為の中では、いつも必要とされているものではないだろうか。例えば、私が去年知り合った大工さんは独学の権化のような人だ。自分の家を改築したときに、この人に来てもらった。歳は当時六五歳だった。名前は高橋茂さん、大工としての腕もとびきりだが、生きる姿もすばらしい。

高橋さんが子どもだった頃は集団就職の全盛期。この人は中学卒業後に埼玉へ出て、大工の親方に弟子入りをした。そこで一番つらかったのは、「自分が何をすればいいか、だれも言ってくれなかったこと」だったそうだ。作業現場に行っても、指示がこない。親方の仕事を後ろから見てみると「仕事の邪魔だ」とか「ぼーっとしているな」などと怒鳴られる。(中略) 働きに出て、何をしたらいいかわからないほどつらいことはない。中学を出て親元から離れたばかりの子どもだから、さぞつらかっただろう。

でも、現場にしばらく通っていくうちに、自分が何をすればいいのかが段々とわかってきた。そうすると、親方と自分の差というものがある、おのずと見えてくる。親方の鉋かんから出る削り屑くずを見て、びっくりする。「どうやったらこんな具合に削れるんだろうか」と考える。夜、皆の仕事が終わり、後片付けもすませてから、一人で鉋を手に取って不用な木材を削ってみる。見よう見まねだ。そうするうちに仕事だんだんとおもしろくなってきたという。奉公に入ってから一年くらいでそうなった。大した進歩、大した教育じゃないか。

大工の奉公働きには、給料なんかない。もらえるのは、何百円かのこづかいだけ。(中略) とにかく仕事以外にすることがない。気がついたら、えらく腕を上げていた。働きはじめて五年目に、親方がいきなり「お前はもう一人前だから給料を出す」と言った。一人前の職人に払う給料をいきなりくれたそうだ。年功序列なんかじゃない。これもまた、ため息の出るほどすばらしいシステムである。

ここで君たちに考えてもらいたいのは、なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか？ ということである。もちろん、意地悪をしているのでも、技術を隠しているわけでもない。口で教えることで死んでしまう技が大工の技だからだ。言葉で教えられたものは、すぐに忘れてしまう。それはただの知識だから。自分の体を使って発見したものは忘れない。そういうものは知識じゃなく、身についた自分の技になっている。

出典：前田英樹著(2015)。「独学する心」(桐光学園+ちくまプリマー新書編集部編『なん何のために「まな学ぶ」のかちゅうがくせい〈中学生からのだいがくこうぎ大学講義〉1』株式会社筑摩書房)

(設問)

上記の文章を要約した上で、「技を身につける」ことについて、あなたの体験をもとに、1200字程度で述べなさい。